看護実践学会誌　Journal of Society of Nursing Practice, Vol.26, No.1, pp.1～3, 2014

会 長 講 演

第７回看護実践学会学術集会

看護実践から学び、看護実践を楽しむ

池野　二三子

公立能登総合病院

日時　平成25年９月14日（土）　場所　和倉温泉観光会館

１．はじめに

ようこそ能登へお越しくださいました。沢山の方にお集まり頂き、第７回看護実践学会学術集会を開催することに心より感謝を申し上げますと共に、大任を与えて頂きました稲垣理事長、理事の皆さま、会員の皆様に厚く御礼を申し上げます。

さて、2020年のオリンピック開催地が東京に決定しました。IOC総会でのキャスターの滝川クリステルさんの「おもてなし」プレゼンテーションを聞かれたかと思いますが、それが東京開催を決定したともいわれています。昔々から日本が持ち続けるおもてなしの心が、私たちにこの素晴らしいチャンスを与えてくれたのではないかと感じています。

私たちの看護、介護も同じではないでしょうか。心の込もったおもてなしの心が、患者様、ご家族、そして私たち看護職者にチャンスを与えてくれている、患者さんの可能性を引き出す看護実践、その持つ力を、皆さまにお伝えできればと思っております。

２．看護と介護が協働する力

生命の誕生に感動し、誰にも訪れる老い。そして病気を持ったさまざまな立場の患者さん、突然に訪れる死への悲しみに遭遇した家族、人生の最期を迎える方といろいろな場面で人の「生・老・病・死」に関わる看護職。一人一人の患者さんの何が問題か、何ができ、何ができないのかアセスメントし、看護計画を立てて看護を実践しています。しかし、それは容易ではなく、これでよかったのか、他にできることはなかったのかと不安や迷いを感じています。そういった苦悩の中でも、互いの看護実践で得た経験知を学び、語り合い、そして共に成長する機会を得ることで、看護が楽しい、看護職でよかった、この仕事を続けたいと実感している仲間がここにたくさんいらっしゃると思います。

胃瘻について、あるいは口から食べることについて、今あちこちで話題になっております。川嶋みどり先生は「目の前の患者さんが本当に食べられるかどうかを真剣に考えてほしい。看護の視点や技を生かすべきである。どんなに少量でも口から食べる価値がいかに大きいか」とおっしゃっています。食べる、眠る、排泄する、体をきれいにするといった基本的な生活行動に対して援助するときに、一つ一つを切り離して別々にアセスメントしようとしても、良い結果にはつながりません。

食べる行動をしっかり援助することで、眠る・排泄するといった行動につながり、生活行動が安定します。入院中から退院後の生活のイメージを膨らませ、その人の生活行動を見据えた看護を実践することが求められます。また、清潔ケアを行うときにはただ単に手足を洗うのではなく、手足を洗いながら毎日刺激を与えることで大脳皮質を刺激し、これが意識レベルの覚醒に変化をもたらします。日々のケアを行うときに、可能な限り体を起こし、筋力が低下する前にどれだけ意識的にリハビリテーションの要素を取り入れるかが大切だと思っています。

患者さんの療養生活を支えるためには、看護と介護の力が必要です。看護ケアは看護と介護を結ぶ大切な手段であり、看護と介護は共に学び、協

働していくことが大切であり、ばらばらでは患者さんの療養生活を十分に支えられません。

３．忘れることのできない三つの事例

これまでの私の看護師人生で忘れることのできない三つの事例から、看護実践を通して学んだこと、看護を楽しいと感じたことをご紹介させていただきます。

１例目は、寝たきり状態から自力歩行へと改善した患者さんです。70代の女性Ａさん。三十数年前、Ａさんは食欲がなく、仙骨部に大きな褥瘡があり、両下肢が拘縮している寝たきり状態でした。当時は、褥瘡処置もまだ確立していない中、先輩看護師と褥瘡治癒に向けて看護計画を立案し、褥瘡部の処置とともに体位変換や座位訓練などを段階的に行い、ついに自力歩行を可能にすることができました。毎日、看護ケアとリハビリテーションを取り入れながらチームで関わり、患者さんはときどき泣きそうになりながらも、寄り添い、励まし合いながら、ついには自力歩行ができ、退院されました。ある日、着物姿でご挨拶にみえたとき、あのときの寝たきり状態の方がすてきな奥様だったとはと見違え、スタッフみんなで患者さんの持つ力に感動し、看護ケアの喜びを語りました。

２例目は、「ナースコール“０”」作戦を実施した事例です。二人部屋に入院していた親子ほどの年の差があるＢさんとＣさん。交互にナースコールをする困った患者さんたちでした。私はこの二人の患者さんを担当することとなり、自分が変わっていくしかないと決心。掲げた目標が「ナースコール“０”」作戦でした。勤務の始めと終わりに、今何かすることはないかと聞き、次に訪室する予定時間を伝え、待つことは可能か、患者さんとの約束を守りました。二人とも体位変換は自力で可能ですが、ベッド上では自立座位ができず、食事介助や日常生活の援助が必要でした。徐々に患者さんとの信頼関係ができ、目標が達成できました。病気に対する不安や、日常生活を自分で思うようにできない悔しさからナースコールを押し、看護師を待っている患者さん。病態や安静度のため、あるいは遠慮などからなかなかナースコールを押せない患者さんも沢山いると思います。患者さんとコミュニケーションを取りながら観察し、患者さんの心の中まで見ることは容易ではありませんが、患者さんが言う前に察知する先取り看護を実感し、看護がとても楽しいと思えた事例です。

３例目は、心不全・腎不全、多臓器不全で人工呼吸器装着中のＤさんです。若い主治医が一生懸命に治療し、たくさんの薬剤を使用していました。ある医師に「俺たち医師は治療している。君たち看護師は何をしているのか」と言われ、はっとし、看護を振り返りました。ナイチンゲールの『看護覚え書』をスタッフと共に読み返し、看護とは何かと考えながら毎日看護ケアに励み、手浴・足浴をしながら刺激を与え続けました。

当時は病態や患者の状態に合わせ、科学的根拠に基づいてうまく医師とチームでカンファレンスする力もありませんでしたが、ふと「野菜や花にも肥料やお水を与えるけれど、やり過ぎると根から枯れていくといわれる。果たして、この患者さんにこのようにたくさんの点滴など注射薬の使用が良いのだろうか？」と思いました。ある日、勇気を奮って主治医に「治療に関して私たち看護師は何も言えませんが、こんなにたくさんの薬剤を使用していると、患者さんの体の中で薬と薬がけんかしているみたいで心配なのですが」と質問したところ、若い主治医は一生懸命に考え、治療と看護を一緒に続けながら、少しずつ、少しずつ点滴は減っていきました。そして私たちも、人工呼吸器を使用しているにもかかわらず、毎日の声掛けと口腔ケア、手浴・足浴、清拭と、皮膚への刺激と、看護の基本に徹しました。

私たち看護師にとって、診療の補助として治療計画を指示どおり実施することは重要な業務ではありますが、それに伴った患者さんの療養上のお世話、患者さんのできることを引き出すにはチームで取り組まねばならないということを実感した事例でした。その後、患者さんはリハビリに積極的に取り組み、リハビリ専門施設へと転院され、ある日、外来受診され、病棟まで歩いて挨拶にみえたときは、スタッフ全員で喜び合ったことを今も忘れません。

４．これからの看護・介護

21世紀の医療のあるべき姿として、治す医療から健やかさを見守る医療へということ。看護師に期待される新たな役割は、看護と介護の協働ケアで、その人の一番望むような方向を考えながら暮らしを支えることだと日野原重明先生はおっしゃっています。

能登地域は20年後の日本の縮図ともいわれています。進む高齢化、暮らしを支えるとはどういうことか、生命の誕生から向き合い、病気を持った人、老いていく人が自分らしくどう生きるか、生

き終えるか、どうしても誰かの手を借りなければ生きづらくなっているところを、その人の一番望むような方向へ行けるように患者さんの力を信じて支える、あきらめない看護を実践し、看護の楽しさを共有していきたいと思っております。

看護実践学会でこのように看護実践をまとめ、語り、学び、やりがい感を感じることで、素晴らしい仲間がいる、看護職が楽しい、また頑張ろうと一歩を踏み出す楽しさを、皆さんも一緒に見つけませんか。今日参加している皆さんを含め、私も看護実践学術集会で臨床と教育でお互いに学び、看護の価値を見つけ、成長できる素晴らしさを感じている一人です。

また、私たちは、説明できる看護、考える看護、責任ある看護を目標に掲げていますが、患者さんからのご意見をたくさん頂きます。あるとき患者さんから、「あの看護師に聞けば何でも答えてくれて、分かりやすく納得できる」と話していただき、仲間として大変うれしく今も忘れられられません。

今後は、深いアセスメント、裏付けあるケアで、質の高いチーム医療を目指し、そして臨床と教育の連携により、患者の可能性を引き出す看護実践の醍醐味を次世代の看護職者にリレーしていきたいと思っております。

ご清聴、ありがとうございました。